

## 近代オスマン帝国における世界史叙述と「トルコ」

小笠原弘幸（青山学院大学非常勤講師）

### はじめに

- オスマン帝国とトルコ共和国：ナショナル・ヒストリー研究のケース・スタディとして
- 研究動向
  - トルコ共和国内におけるナショナリズム研究の困難さ
  - オスマン帝国治下では、トルコ主義は最後まで公式の主張とならなかった
- 目的と対象範囲
  - 歴史書（世界史書に準ずるもの）の構成の変化を、「トルコ史」に焦点を当てて検討
  - 19世紀半ば～オスマン帝国の滅亡(1922年)までの間に著された歴史書のうち、トルコ主義的影響が顕著なものを抽出

### 1. 前近代の史書における「トルコ」

- イスラーム的世界史
  - 天地創造、諸預言者、(古代イラン諸王朝)、イスラーム諸王朝
  - オスマン帝国最初期の世界史書『訓命の書』(1465年)の例
- 「トルコ」の取り扱い
  - 古代トルコ史は対象外。代わりに、伝説的なオグズ伝承を含む
  - オスマン朝の起源は、「ノアの息子ヤペテ」であり「オグズ族の名家カユ氏族」
  - 初期年代記以外では、「トルコ」は「アナトリアの粗野な田舎者」を指す否定的な言葉

### 2. 近代的歴史学とトルコ主義のはじまり

- アフメト・ヴェフィク
    - 近代的歴史学とトルコ主義の先駆者。パリで教育を受け、官僚として要職を歴任、最終的には大宰相となる
    - 歴史学の著作：『歴史の学』(1863年。総合大学での講義要旨)、『オスマン史概要』(c.1869年。中学校の教科書)
    - トルコ主義の著作：『トルコの系譜』(1864年。アブールガズィーの著作の翻訳)、『オスマン語辞典』(1876年)
- ※歴史書においてトルコ主義的視点はみられない（『オスマン語辞典』「トルコ」の項目）

### 3. 新しい世界史の登場と古代トルコ史への視点

- アフメト・ヒルミー『一般史』全6巻(1866-78年。士官学校の教科書)
  - 師範学校教師を経て翻訳局書記官
  - 最初の4巻はイギリスのチェンバース歴史叢書シリーズ（『古代史』『古代ギリシャ史』『古代ローマ史』『中世史』）の翻訳。後にアッパース朝以降のイスラーム史(5、6巻)が付け加えられる
- スレイマン・ヒュスニ『世界の歴史』(1876年。士官学校の教科書)
  - 士官学校校長。1876年のクーデターに参加、その後バグダードに左遷
  - ヒルミーを批判。古代トルコ史を取り入れ、トルコの歴史的役割を強調
  - ド・ギーニュ『フン、モンゴル、西方のタタール人の歴史』全5巻(1756-58年)を利用
  - 「天地創造・諸預言者の歴史」+「古代オリエント、ギリシア・ローマ史」+「古代トルコ史」（オ

スマン史なし)

- 教科書として書かれたが、長く用いられなかった→公教育の場ではトルコ主義は不採用？

#### 4. トルコ史の延長としてのオスマン帝国史

- アフメト・ミドハト『詳説近代史』全3巻(1886-88年。新聞連載をまとめたもの)
  - 新聞の編集者・小説家として、西洋文化の啓蒙に尽力
  - ヴィクトル・デュルイ、エルネスト・ラヴィスの間接的な影響
  - 「天地創造・諸預言者の歴史」+「古代オリエント、ギリシア・ローマ史」+「イスラーム受容後のトルコ系諸王朝史」+「オスマン帝国史」(古代トルコ史なし)
  - 初めてオスマン帝国史をトルコ史の延長として位置づける
  - ヨーロッパの歴史学の方法論を導入(西暦、時代区分、史料批判)。その際、トルコの歴史的役割を強調する方向で読み替える
  - 史料批判を行い、オスマン王家の伝説的な起源を検証、イスラーム的歴史観に基づいた部分を切り捨てる

#### 5. 独立したトルコ史の登場

- ネジブ・アースム『トルコ史』(1900年)
  - 総合大学の歴史・言語教師
  - 大部分をレオン・カオン『アジア史序説』(1896年)に依拠
  - 「古代トルコ史」+「イスラーム受容後のトルコ系諸王朝史」
  - トルコに対する否定的な記述を削除、肯定的な記述を付け加える
- ネジブ・アースム、メフメト・アーリフ『オスマン史』(1919/20年。オスマン歴史協会刊行物)
  - 「古代トルコ史」+「イスラーム受容後のトルコ系諸王朝史」+「オスマン史の前提としてのビザンツ帝国史」+「オスマン帝国史」
  - オスマン帝国のトルコの起源(オグズ伝承)について史料批判を行う。オスマン人がトルコ系オグズ族の名家であることは讃美するが、王家の神話的な系譜については懐疑的。「王家の起源」ではなく、「国民の起源」(民族的なルーツ)を重視 ※アフメト・ミドハトの発展
  - 初期年代記に見られ、後に顧みられなくなった「オグズ族の儀式による建国」の記述を発掘、再評価

#### おわりに

- ヨーロッパにおける歴史学・トルコ学の影響
  - 最初は直輸入だが、次第にヨーロッパにおける言説の「換骨奪胎」や、オスマン帝国自身の史書の読み直しが試みられる
- 王家の持つ伝説的系譜の切り捨てと、民族的起源の強調が同時並行的に進む
  - 王家の起源から国民の起源へ
- 「古代トルコ史」、「イスラーム受容後のトルコ系諸王朝史」、「オスマン帝国史」を「世界史」のなかに包摂した歴史書は最後まで書かれなかった
  - オスマン帝国治下では、トルコ主義は最後まで公式の主張とならなかったことを反映
  - トルコ・ナショナリズムの究極の形といえる『トルコ史概要』を準備
- 他のアジア諸国と共通のモジュールを利用。独自性は？